

なぜ混迷の時代にミッションスクールの使命は重要なのか

池田 洋子

Why in These Times of Confusion is Mission School Education Necessary.

Yoko Ikeda

Just as we question our lifestyles as human beings, in daily life we can see the loss of ethical and moral values. The absence of religion may be the root cause of this loss of the norms of ethical and moral conduct in our present day society so the necessity of a return to religious education becomes evident. It is within this context that Catholic Schools have a mission to bring the message of Jesus Christ which is imbued with ethical principles to children and youth. In this paper I will study what influence the Catholic Church and Christian Studies have on the formation of values in our youth, and deepen our understanding of why Mission Schools are so necessary in this era of confusion.

はじめに

国境を越えて資本・情報・労働力が移動するグローバル化が進展し、日本も社会や経済の変動が大きくなりつつある。歴史を紐解けば、社会・経済の大きな変動は教育のあり方を変えてきたことがわかる。高等教育機関のあり方も根底からの変化が求められる時代に突入したといえる。では今、教育に何が求められているのだろうか。2014年初頭の朝日新聞の特集記事は「教育」だった。さらなるグローバル化が進展していくなかで英語教育の重要性が取り上げられていた。しかし、国際社会を生きていく上で英語力も必要だが、それ以上に人は身に付けなければならないことがあるのではないかと。新潟県国際情報高校の平田正樹校長は「英語力も大事だが、グローバル人材に一番必要なのはぶれない価値観、自分が大切にしていることに気づくこと」¹⁾を指摘している。英語力など社会のツール以上に若者に必要なのは、「気づく」力と、生きていく上での指針「ぶれない価値観」の形成ではないだろうか。

日本は国際社会で活躍するグローバル人材の養成を目指しているが、一方、「不登校」、「いじめ」、そして「引きこもり」などで社会に参画できない若者も多数存在していることは周知の事実である。理想と現実の大きなギャップを抱えているのが、今日の教育の一面でもある。人間関係の希薄さ、過酷な受験競争、安全ネットの少ないすべり台社会など、さまざまな要因が絡み合っただけで閉塞感を感じさせる。どのように生きたらいいのか、どのように人と関わったらいいのか、どのように働いたらいいのかと若者の悩みはつきない。多様な情報や価値観のうずまく社会の中で自分の生活の道しるべを見つけることは容易なことではない。社会生活のなかで生きる術を教えていた大人も周囲の若者に目をかける時間が少なくなっている。若者は社会生活を営む上で必要な生きる姿勢をどこで学ぶことができるのか。人と人とのかわりの基本となる道徳教育の重要性が見直されていることは、混迷の時代の一つのニーズなのかもしれない。

経済界の中で活躍している稲盛和夫氏は、今日こそ人間の「生き方」が問われている時代はなく、宗教の不在がその根底にあると指摘している。「なぜ、わたしたちはそれほど根源的な道徳規範を失ってしまったのか。人を思いやる心、利他の心を忘れてしまったのか。その答えは簡単です。要するに、大人が子どもにそれを教えてこなかったからです。戦後およそ60年がたっていますから、いま生きている多くの日本人は道徳について何も教えられていないといっていでしょう。私は戦前の教育を受けた人間なので、そのことがよくわかります。自主性の尊重を放任と拡大解釈し、自由ばかり多く与えて、自由と対をなす人間として果たすべき義務については、ほとんど教えてこなかった。人間として備えるべき当たり前の道徳、社会生活を営むうえでの最低限必要なルールを身につけることを、私たちはひどくおろそかにしてきたといえます。昔から、そういった生きる指針となる哲学というものを人々に教えてくれていたのは、仏教やキリスト教に代表される宗教でした。それらの宗教の教えは人々が生活を営むうえでの道徳、規範となっていました。……『人間として正しいことは何か』ということを考えざるをえなかった。しかし近代の日本では、科学文明の発達に伴い、こうした宗教はないがしろにされてしまいました。それに伴って、人間としてあるべき姿を指し示す道徳、倫理、哲学、そういったものさえも、しだいに忘れ去られてしまったのです。哲学者の梅原猛先生が『道徳の欠如の根底には宗教の不在がある』とおっしゃっていますが、私もまったく同感です。』²⁾

稲盛氏が指摘するように、根源的な道徳規範を失った現代社会において道徳の根底にある宗教教育の重要性が浮かび上がってくる。カトリック学校はその使命としてイエスの生き方を伝えることによって、根源的な道徳規範を含むカトリック的価値観を子どもや若者に伝えてきた。「ぶれない価値観の形成」こそ、長い伝統を持つキリスト教が伝えてきたことである。今日、どのくらい子どもや若者がミッションスクールに通っているのでしょうか。教育の一

環としてキリスト教に触れる機会のあるミッションスクールには、プロテスタントとカトリックがある。プロテスタントのキリスト教学校同盟には小学校から大学まで286校があり、学んでいる児童、生徒、学生数は34万人を超えている。³⁾ また、カトリックでは2011年5月現在、小学校から大学まで約300校あり、15万人の児童・生徒・学生が学んでいる。⁴⁾ このようにミッションスクールは日本社会の中でキリスト教的価値観を伝える重要な場になっている。

本稿では、カトリック教会や「キリスト教学」で伝えていることが若者の価値観形成にどのような影響を与えているかなどを検討し、なぜ混迷の時代にミッションスクールの使命は重要なのかについて、探求を試みる。

I 求められる「道徳教育」

2013年度から再配布されている文部科学省の道徳教材「心のノート」が2014年春に改訂されることになった。「心のノート」は2002年に道徳教育の充実を目指して作成され、全国すべての小学校及び中学校に配布された。しかし、民主党政権の事業仕分けで冊子配布からウェブサイト掲載に切り替えられた。今年度から自民党が政権復帰したことで「心のノート」は再度配布されることになった。

「心のノート」は2009年にも規範意識を重視した内容に改訂されたが、これは2008年の文部科学省の小学校・中学校の学習指導要領改訂によるものである。この学習指導要領において、教育内容に関する主な改善事項の4番目にあげられているのが「道徳教育の充実」である。具体的には「道徳性の涵養については家庭の果たす役割が大きいことを前提にしつつ、学校教育においては、発達の段階に応じた指導や体験活動などを通じた生活習慣や最低限の規範意識の確立、民主主義における法やルールの意義の理解」を掲げている。⁵⁾

来春の改訂版には、子どもが実在の人物を自分に置き換えて考えることができるよう、多くの偉人伝が掲載されることになっている。「心のノート」に掲載が検討された主な人物と狙いは次の人々である。「ワシントン（米大統領）・正直な心」「澤穂希（サッカー選手）・粘り強くやり遂げること」「内村航平（体操選手）・希望と勇気、努力」「野口英世（医学者）・互助への感謝」「大岡忠相（江戸期の幕臣）・不正を見極め、誘惑に負けない」「トルストイ（作家）・外国文化を大切に作る心」「マザー・テレサ（修道女）・人間愛の精神」「孔子（思想家）・寛容の心、謙虚」「洪沢栄一（実業家）・公德心と社会連帯」「岡倉天心（美術家）・伝統や文化への誇り、愛国心」⁶⁾ 歴史的な人物から今活躍中の体操選手まで様々な人物が取り上げられている。

このような背景のもと、道徳教育の研究会や伝記教材の開発が活発化してきている。2012年に第一回道徳教育推進研究全国大会が開催されたが、テーマは「人物の伝記や実話史料を

活用した道徳授業」であった。開催趣旨は次のように記されている。「2007年に教育基本法が改正され、『道徳』の学習指導要領では新たに、『先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材とし、生徒（児童）が感動を覚えるような魅力的な教材の開発や活用を通して、生徒（児童）の発達の段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うこと』が加えられた。そして、多様な教材を生かした創意工夫ある指導を行うことが一層重視された。そこで本研究会では、児童・生徒が自分の生き方を問うための『型（モデル）』を見出せる『人物の生き方やエピソード』として、どのような資料が良いのか、また、そのような資料を使ってどう授業を行えるのか、基調講演や指導授業、そしてパネルディスカッションなどを通して掘り下げていきたい。」つまり、児童・生徒が自分の生き方を問うための「型（モデル）」を探ることができる教材や指導の開発が求められている。

この全国大会の基調講演のテーマは「人物の生き方に学ぶ道徳教育」であった。武蔵野大学教授貝塚茂樹氏は講演の中で戦前と戦後の道徳教育について次のように語っている。「戦前の道徳教育には、『徳目主義』と『人物主義』のどちらをとるかという大きな課題がありました。『徳目主義』では、忠義、孝悌（こうてい）などの徳目の意味を毎年くり返し教え込み、『人物主義』では、偉人の生き様を紹介します。徳目は抽象的であるために、授業は形式的なものになりやすく、一方、伝記は、行き過ぎると、興味を喚起するだけのただの‘よもやま話’に陥る危険がありました。したがって、いかに『徳目主義』と『人物主義』のバランスをとるかが重要であり、そのふたつの折衷を意図して編纂されたのが、明治36年の国定の修身教科書です。この教科書は、どうしたら『徳目主義』と『人物主義』のそれぞれの良い点を生かせるかを編集テーマのひとつとして、作られたものです。ところが戦後になりますと、そのバランスが崩れ、人物主義が後退していきます。人物の中に理想的な人間像を見出して、それをひとつのモデルとして子供たちに提示することがされなくなっていきます。もちろん、歴史的偉人を通した理想像だけを提示するだけでは、子供たちの現実から乖離してしまいます。子供たちが、経験する様々な状況において、自分で道徳的判断を下させるように、『徳目主義』と『人物主義』のバランスをあらためて真剣に考えるべきだと思います。』⁷⁾

貝塚氏の指摘にもあるように、子どもに先人の生き方を伝えるだけでは不十分であり、子どもが歴史的偉人の生き方を学ぶことを通して、自分が経験する様々な状況において道徳的判断が下せるようになることが肝要である。子どもたちが必要としているのは「価値について学べる教材」である。鈴木は「道徳的価値に気づかせるための伝記教材の開発」の中で道徳的価値に気づく有効な手段として価値葛藤を取り上げている。⁸⁾ また、先行研究の結果から日本の子どもには独自の価値葛藤のプロセスがあることも指摘している。「11歳頃の子どもは、自己中心性と他者意識とを交互的にとらえる第三者的視点を持つことが困難であり、その結果、自己中心性を強く残す結果になることが明らかになった。したがって、11歳頃か

ら、子どもたちに、自己中心的思考と他者意識とを相互的に捉える第三者的視点を持たせるように指導することが必要だと考えられる。」子どものこのような思考スタイルを変革するためには、「日本の先人たちが経験した価値葛藤とその克服のための考え方を学ぶのが適切」であるとし、生命尊重と義務の遂行との葛藤を超えて、人道的立場から判断を下した「杉原千畝」を取り上げている。

では実際に、子どもたちは読書活動の中で伝記や偉人伝をどのくらい読んでいるのだろうか。2003年に仙台市教育委員会が行った「子どもの読書活動に関するアンケート調査結果」⁹⁾によれば、小学5年生(3,486人 回収率95.3%)の好きな本の種類は1位が小説や物語(49.3%)、2位は趣味・スポーツ(21.1%)、3位は図鑑(7.9%)、4位に歴史物語(5.4%)と並んで伝記(5.4%)となっている。伝記は中学2年生(1,974人 回収率90.1%)になると、2.0%に減少している。現在、子どもたちの読書活動の中で伝記や偉人伝は大きな位置を占めているとは言い難い。

子どもの読書活動に影響を与える要因の一つは家庭環境である。2004年に仙台教育委員会が文部科学省委託事業として行った「親と子の読書活動に関する調査」¹⁰⁾では、保護者自身が読書好きであるほど、その子どもも本が好きになる傾向が認められた。すなわち、親の価値観が子どもの読書活動に深いかかわりがあることがわかる。濤川は「読書の価値を重視する家庭で育った子は知的、情緒的、精神的、人間的、社会的力量を大きく培っている。読書の最大の教材」となっていたのが、「人物伝」であり、親が読んで聞かせることは子どもに大きな影響を及ぼしている指摘している。¹¹⁾

伝記や偉人伝は中学生になると読む率が減少していくが、「人物伝」や「偉人伝」は子どもだけの読書分野なのだろうか。松下幸之助、本田宗一郎、中内功、スティーブ・ジョブズなど、ビジネス書として多くの人物伝が今でも社会人の中で多く読まれている。渡部昇一の著書『人を動かす力——歴史人物に学ぶリーダーの条件』¹²⁾の中には、徳川家康、西郷隆盛、大久保利通が登場してくる。子どもだけでなく、大人も先人から現代人に至るまで多くの人の生き方から何かを学び取っていることがわかる。

ビジネス書ではなく、『大人のための偉人伝』を著した木原武一はリンカーン、ガンジー、キュリー夫人、野口英世などを取り上げ、偉人伝は幼少時代の貴重な読書体験だけでなく、大人にとっても効用があると述べている。「偉人の生涯は感動的で、面白い。そして、親や教師が教えることも、模範を示すこともできないような人間のすばらしい生き方、行動、ものの考え方を伝えてくれる。幼少のみぎりに偉人伝から得た感動や教訓が幾分なりとも残存していれば、大人の世界も少しは変わってくるのではなかろうかとさえ思えてくる。」¹³⁾また、彼は大人に偉人伝を読むことを薦めている。「偉人伝から学ぶべきはむしろ大人のほうではなかろうか。子どもにとっての模範が大人にとっても模範であってなぜいけないのか。」

木原は2年後に『大人のための偉人伝』の続編を書き、断固として自分の生き方を貫いた人たち、トルストイ、マルクス、レオナルド・ダ・ヴィンチ、福沢諭吉を紹介している。¹⁴⁾人間は生きていく上で本来「型（モデル）」が必要なのだろう。道徳教育だけでなく、心理学においても「型（モデル）」は人間の成長において重要な要素である。心理学の手法の一つであるセルフサポート・コーチング法では、自分の中に成功モデルを持ち、ひたすらそうなりたいとイメージするとよいと言われている。また、ユニークな学者として知られている鎌田浩毅氏は「知的生産な生き方」には「ロールモデル」が必要であると語る。「私は自分を導いてくれた『良きもの』を、有形・無形を問わず『ロールモデル』と名付けてみました。ロールモデルとは心理学の用語ですが、役割（ロール）のひな型（モデル）となるような存在のことを言います。自分の人生で目標とする具体的な像と言ってもよいでしょう。私は自分の行動の規範となるお手本（ロールモデル）を、京都の周辺で見つけました。さまざまなロールモデルからそれぞれの良いところを吸収し、自らの生活に生かした結果が、今の私なのではないでしょうか。こうした『生き方』は、実は誰にでもできることなのです。自分のまわりに優れた人や美しいものを発見し、そこにできるだけ近づきたいと願うのです。読者の皆さんも自分にふさわしいロールモデルを持つことで、知的な毎日を送ることができると思います。」¹⁵⁾ 知的生活にも模倣が重要であることがわかる。

人間の生き方の根底には「型（モデル）」や「規範」のような人間としての根本の原理原則が必要なのだろう。偉人の生き方は一つの「型（モデル）」や「規範」を私たちに提供していると言える。

II 大学の使命

高等教育機関において「価値観の形成」に大きな影響を与えていたのが、一般教育あるいは教養教育だった。大学の教育が専門的な知識の習得に偏らないように、学生に学問を通じて広い知識を身に付けさせるとともに、ものを見る目や自主的・総合的に考える力を養うことを目的としていたのが一般教育の理念であった。1956年に制定された大学設置基準において一般教育科目が必修と規定されたが、残念ながらそれは十分に一般教育の理念を実現するには至らなかった。この規制は1991年の一般教育、専門教育、外国語、保健体育の科目区分の廃止などにより、大幅に緩和され、各大学による多様で特色あるカリキュラムの編成が一層可能となった。この大学設置基準の大綱化と自己点検・評価システムの導入を契機にカリキュラム改革や教育組織の見直しが進展したが、一般教育あるいは教養教育の理念は後退が懸念されるようになった。そのため、大学審議会、中央教育審議会、そして教育改革国民会議などで審議が行われ、教養教育の重要性が再確認されるようになった。

現在は「大学全入時代」と言われている。大学への入学希望者数と大学の入学定員総数が

一致する状況であり、また、2009年の大学進学率は50.2%、現在では2人に1人が大学に進学している。大学には三つの使命、「教育」・「研究」・「社会貢献」があるとされている。大学が教育を通じて生み出す人材は次の研究を支える人材になると同時に、そのような人材が社会に多く輩出されることは大学の最大の社会貢献でもある。1955年ではわずか7.9%だった進学率が現在では50%を超えるまでになったのであるから、高等教育を受けた人材が社会に多く輩出されていることになる。

しかし、大学全入は「大学生の絶望的なまでの学力低下」や「大学卒業生の就職状況の悪化」などを引き起こし、「受験学習をまったく経験せずに選抜されてしまったノンエリート大学生」を多く生み出している。居神はこのようなノンエリート大学生を抱える大学を「マージナル大学」という概念で呼ぶことを提起し、マージナル大学の具体的な教育課題として「リメディアル教育」と「キャリア教育」を挙げている。¹⁶⁾つまり、「マージナル大学においては職業または实际生活に必要な能力の育成を大学教育の主な目的と考えざるをえなくなってきた」¹⁷⁾と指摘している。大学生の基礎学力の低さは、日本の学歴社会による小学校から高校にいたるまでの教育の結果ともいえる。また、受験のための勉強は知識偏重を生み出し、实际生活に必要な能力を開発する機会を奪っている。

学校は働くことの意義を教えることも重要であると稲盛和夫氏は警鐘を鳴らしている。「現在の日本には、学業のできる子どもと苦手な子どもを選り分けして、前者を優遇するという学歴社会ができ上がっており、そのことが若者の労働観をずいぶんゆがんだものになっています。いい成績を上げて官公庁や大企業に入ることをよしとして、手先が器用であるとか、人と接するのが得意であるといった、学業以外の特性は置きざりにされているのです。こういう現状を正すためにも、たとえば小学生のときから、世の中にはこれだけ多くの職業があり、それぞれの分野でたくさんの人が懸命に働いている。だからこそ社会や人間の暮らしが成り立っているのだということを教えていく。……大工に限らず家具職人、裁縫師、あるいはお百姓や漁師など、どんな職業であってもその仕事に打ち込むことが心を磨き、人格を高めることに通じます。そのような働くことの意義、つまり正しい職業観を教えてあげるのも、教育の大きな役目であるはずです。」¹⁸⁾様々な分野の人と出会う機会の多い稲盛氏は、「心を磨き、人格を高める」ことは官公庁や大企業で働くだけでなく、どんな職業であっても可能であると語る。

河合塾教育研究部プロジェクトチームに参加して「国立大学教養・共通教育調査」や「初年次教育調査」に関わった友野伸一郎氏は、大学の教育力を見るには「教養教育と初年次教育が重要である」¹⁹⁾ことを述べている。大学選びの新たな指標は、偏差値やブランド力に頼らない大学の真の実力である教養教育の充実度である。また、大学の教養教育に対する姿勢は①「履修指定」が必修で設けられているか、②「初年次ゼミ」が必修で設けられている

か、③「学際的科目」が必修で設けられているか、の3つのポイントでわかると指摘している。²⁰⁾ とくに教養教育を全学生に必修で「履修指定」を行っているかどうかが大切であり、自由選択にすれば学ばせたい学生ほど、それを選択しない結果になるとも述べている。

では、大学における教養教育の「教養」とは何か。「教養とは自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のために何ができるかを知っている状態、あるいはそれを知らうと努力している状態」²¹⁾と阿部謹也氏は示唆に富む「教養」の定義を行っている。このように教養のある人を定義すると、さまざまな人が対象になり、知識人だけでなく、農民や漁民、手工業者たちも含まれることになる。従来の教養概念は「学歴の高い人、ブルーカラーでない人、書物などに通じている人といったイメージ」で、極めて偏狭なものであった。阿部氏は「教養とは生活世界の中で大きな位置を持つもの」であり、「教養とは人の生き方であり、ひとり一人が自分の生き方を社会との接点を求めて考えていくこと」であると述べている。

阿部氏は教養ある生活の一つの事例として江戸時代の農民の教養について『学問と「世間」』の中で取り上げている。それは江戸時代前期に成立したと考えられている『百姓伝記』で、その中には「人間が常に守るべき五つの道」が語られている。「人の一生はわずか50年であるが、その間に悪名をはせた者は家屋敷や家督ばかりでなく、子孫までも失う。手さぐりながらにせよ、仁義礼智を重んずる百姓は自分の村までも豊かにして、お上からもほめられる。すべての悪事は、飲、食、色、欲からはじまる。……仏や神を信じ、お上をうやまい、父母兄弟に孝行をつくし慈悲心を第一にして、人には憐れみをかけること。そうすれば一生は安泰で、しかも子孫は豊かになるのである。」²²⁾ 時代的制約はあるものの、現代では忘れられつつある本質的な人間関係のあり方や生き方が述べられている。これは農民がいかに勤勉であったか、教養があったかを示す貴重な史料といえる。また、「農民や漁民や手工業者たちが集団として生きていくときに集団として考えてきたその考え方も教養の一つであり、教養には個人の教養と集団の教養との二つの形がある」と阿部氏は教養の概念を広げている。時代が求めている「教養とは何か」について私たちはじっくりと再考する必要があるのだろう。

また、阿部氏は大学の使命として次のことを述べている。「これからの日本の大学はヨーロッパにおけるかつての教会の役割を果たしていかなければならないと思う。この世には金や名誉や地位とは関係のない価値があることを若いうちに知らなければならないからである。」

²³⁾ 金や名誉や地位などのこの世で尊重される価値ではなく、キリスト教の価値観に基づいた全人教育を目指しているのがプロテスタントやカトリックのミッションスクールである。桜の聖母短期大学の建学の精神は「愛と奉仕の精神に生きるよき社会人を育てること」である。その教育目標は「『キリスト教的価値観』に基づいた『全人教育』、それは自己、人間、社会に対しての広く、深い理解をもつ統合された人格の育成を希求する教育、この教育を通して、思考力、判断力、表現力、自由な精神、心の豊かさなどを涵養する」ことである。そしてミッ

ションステートメントの一番に掲げているのが「イエス・キリストの愛に学ぶ」であり、「キリストにならう生き方」を伝えていくこととも言える。

Ⅲ キリストにならう生き方

カトリック教会の前教皇ベネディクト16世は現代世界に「一人の人間としてこの地上に生きた人間イエス・キリストの姿」を正しく伝えるために『ナザレのイエス』を著した。イエス・キリストは「完全に人間として生きたのですが、同時に人々に神をもたらししました。彼は『子』として、神と一つであったのです。こうして人間イエスを通して神が現され、あるべき人間の姿が神によって示されたのでした。」²⁴⁾ その著書の中でベネディクト16世はキリストを信じる「民は神から、そして究極的には生けるキリストからそのいのちを受け、キリストに倣い、キリストによって導かれなければなりません」と語っている。²⁵⁾

「あるべき人間の姿」を示したナザレのイエスは、ユダヤ社会の中で一人のユダヤ人として生まれ、ユダヤ教の枠内で成長し、活動し、その宗教的伝統の理想を生きた。このイエスによって選ばれた12人の弟子と、復活したキリストに出会ったパウロによってナザレのイエスの福音が多くの人々に聖なる伝承（聖伝）として伝えられていった。とくにユダヤ人以外の民族（異邦人）に福音をもたらし、ユダヤ教のなかで発足したキリスト教が世界宗教になったのは、パウロの働きが大きい。イエスを信じた信徒に宛てたパウロの手紙は、新約聖書に含まれる27の諸文書のなかで13も含まれ、4つの福音書よりも早く書かれている。「パウロ自筆の手紙はすべて、イエスの死後およそ30年までに書かれたが、福音書はすべてパウロの死後に書かれたものである。それはパウロの手紙が時間的に歴史的人物としてのイエスに近い時期に、そのイエスを伝えるものとして書かれたということである。」²⁶⁾ パウロの手紙を通してイエスの生き方が浮かび上がってくる。

ローマに護送され、殉教するまで骨身を削ってイエスのために働いたパウロは、洗礼を受ける前は熱心なユダヤ教徒でイエスの弟子たちを迫害していた。しかし、パウロは信徒たちを迫害するためにダマスコに向かう途上「主イエスと出会い」、価値観の大転換を体験した。これがパウロの回心と呼ばれている出来事である。当時の体験をフィリピの信徒へ宛てた手紙の中に書いている。「わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義については非のうちどころのない者でした。しかし、わたしにとって有利であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。」（フィリピ3：6-8）

パウロの回心は突然、思いもよらない衝撃的な出来事であった。また、その主イエスとの出会いによってユダヤ人以外の民族に対して「ナザレのイエスの福音」を伝える使命を与えられたとパウロは深く自覚した。「わたしはこの福音を人から受けたのでも教えられたのでもなく、イエス・キリストの啓示によって知らされたのです。あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかを聞いています。わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。また、先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの者よりもユダヤ教に徹しようとしていました。しかし、わたしを母の胎内にあるときから選び分け、恵みによって召し出してくださった神が、御心のままに、御子をわたしに示して、その福音を異邦人に告げ知らせるようにされたとき、わたしは、すぐ血肉に相談するようなことはせず、また、エルサレムに上って、わたしより先に使徒として召された人たちのもたに行くこともせず、アラビアに退いて、そこから再びダマスコに戻ったのです。」(ガラテヤ 1:12-17) パウロはナザレのイエスと同じ時代を生きていたが、生前のイエスに会うことはなかった。自分に起きたこの出来事の意味を彼は「アラビアに退いて」思い巡らしていたと思われる。

イエスの弟子となり、3回の大きな宣教旅行を行ったパウロであったが、念願のローマ宣教は果たせなかった。しかし、彼はまだ見ぬローマの信徒へ宛てた手紙の中で自分の宣教者としての使命を綴っている。「兄弟たち、あなたがた自身は善意に満ち、あらゆる知識で満たされ、互いに戒め合うことができると、このわたしは確信しています。記憶を新たにしてもらおうと、この手紙ではところどころかなり思い切って書きました。それは、わたしが神から恵みをいただいて、異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となり、神の福音のために祭司の役を務めているからです。そしてそれは、異邦人が、聖霊によって聖なるものとされた、神に喜ばれる供え物となるためにほかなりません。そこでわたしは、神のために働くことをキリスト・イエスによって誇りに思っています。キリストがわたしを通して働かれたこと以外は、あえて何も申しません。キリストは異邦人を神に従わせるために、わたしの言葉と行いを通して、また、しるしや奇跡の力、神の霊の力によって働かれました。こうしてわたしは、エルサレムからイリリコン州まで巡って、キリストの福音をあまねく宣べ伝えました。このようにキリストの名がまだ知られていない所で福音を告げ知らせようと、わたしは熱心に努めてきました。それは、他人の築いた土台の上に建てたりしないためです。」(ロマ15:14-20) 原始キリスト教の人々は十字架上で死んだイエスをキリスト、つまりメシア(救い主)であると確信し、パウロはこれを異邦人の中に説いてまわった。パウロは十字架上で死んで復活したナザレのイエスを伝えることは、彼の内に生きているキリストの働きであると考えている。このように原始キリスト教の人々によって「イエスはもはやユダヤ民族のみならず、すべての人にとってかけがえのない人生の教師であり、人類の宝となった。」²⁷⁾

パウロの中で働いた「生けるキリスト」は教会の中で「聖伝」「聖書」そして「人々の証し」を通して伝えられていった。中世には「第二の福音書」と呼ばれる、中世キリスト教文学の最高峰『イミタチオ・クリスティ（キリストにならいて）』が書かれた。これは中世特有の美しいラテン語で書かれたキリスト教的修徳書の逸巻である。第1巻の冒頭の言葉「キリストとの一致」こそ、キリストを信じる人々の生き方の指針であった。『「私に従う人は闇のなかを歩かない』（ヨハネ8:12）と主は言われる。これはキリストのみことばである。もし私たちがまことの光に照らされ、心の暗やみを抜け出したいなら、その生涯とおこないにならわれなければならない。したがって、私たちの第一の務めは、イエス・キリストの生活を黙想することにある。』²⁸⁾また、1巻3章にはパウロの言葉が引用されて「まことの知恵者」について書かれている。「大いなる愛をもつ人こそ偉大な人である。自分を小さな者だと考え、最高の名誉さえも、空しいものだと思う人こそ、ほんとうに偉大な人である。キリストを得るために、地上のものをすべて、塵芥だと思う人こそ、まことに懸命な人である。（フィリピ3:8）自分の意志を捨てて、神のみ旨をおこなう人こそ、まことの知恵者である。』²⁹⁾人生においてキリストから謙遜と愛を学ぶことを奨めている。

この本はキリストの善徳を学び、倣い、自己の聖性を志す霊的文書として聖書に次いで各国語に翻訳されている。日本にキリスト教がもたらされたのは、1549年鹿児島に上陸したフランシスコ・ザビエルによってであるが、『イミタチオ・クリスティ（キリストにならいて）』はザビエル上陸後からおよそ50年後の1596年には「コンテムツスムンヂ」と邦訳されて和訳ローマ字本天草版として出版された。キリシタン大名であった高山右近や細川ガラシャなど多くのキリシタンがこの本を愛読し、信仰の模範の先達にならった生活を目指した。

カトリック教会には教会によって公式に認定（列聖）された聖人が大勢いる。聖人とは一般的に徳が高く、人格高潔で、生き方において他の人物の模範となるような人物である。彼らは「生けるキリストからそのいのちを受け」、歴史的制約を身に纏いながらも懸命に生き、教会のために貢献した人々である。桜の聖母学院の創立者聖マルグリット・ブルジョワ（1620-1700）もその一人である。彼女は手記のなかで修道会の会員に次のように教えている。「会憲、それは主イエス・キリストです。キリストは模範とみことばと十字架によって神の掟を守る道を示すため、天から下って人となりました。この掟とは『心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛し、神のみを礼拝せよ』、『自分と同じように隣人を愛せよ。何事でも、自分にしてもらいたくないことは、ほかの人にしてはならない。自分にしてもらいたくないことは、ほかの人にもそのようにせよ』という掟です。』³⁰⁾また、イエス・キリストを信じる人々は「キリストにならう」だけではなく、聖人の信仰の模範にならって生きてきた。男子修道会サレジオ会の創立者である聖ドン・ボスコは次のように奨めている。「死すべき人たちよ、聖人方の栄光ある足跡に従いなさい。それは栄光の道であり、

幸福の道でもあります。』³¹⁾

「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」(マルコ16:15) イエスが弟子たちに与えた使命を継続していくために、信仰共同体である教会は現在に至るまで絶えない努力を行っている。そのひとつが第二バチカン公会議以降の「要理教育」の刷新である。教会共同体に入ることを考えている求道者のための入門書である要理書の作成においても、その内容、表現方法、教授法などを時代と共に変化させている。カトリック信者の多い長崎地区の教会で使用されている要理書「共に歩む旅」は、韓国の教会の要理書を踏まえて作られた。この要理書の目的は次のように書かれている。「この教理書(要理書)は求道者が洗礼を受けるまで、小共同体の中で信仰を深く体験し、信仰の道りを共同体と共に歩むのに役立つために作られました。この教理書を通して求道者たちがキリストと出会い、その生き方を見習うことで神に似た人間として変わることを願っています。』³²⁾ 教会では原始教会の時代から現在に至るまで、「キリストと出会い、その生き方にならうことで神に似た人間として変わることを」を目指してきたと言える。

IV キリスト教学Ⅰ・Ⅱ

本学のカリキュラムのなかにキリスト教関係科目群(H26年度からは人間総合科目群)と呼ばれる科目がある。この科目群は短大の理念に直結するカリキュラムであり、その中にキリスト教学Ⅰ・Ⅱ(全学共通科目・必修4単位)がある。本学のすべての基盤であるキリストの価値観について学ぶもので、キリスト教学Ⅰは1年次、キリスト教学Ⅱは2年次に履修する。これらは本学の建学の精神に触れる科目であり、学生が「キリスト教と出会う場」として位置づけられている。キリスト教を知的関心の対象として学ぶことは、自己の人生観、価値観、世界観を構築する糧とすることができる。また、「気づき」の能力を開発するために、立腰や瞑想などを授業に取り入れている。さらに、本学の創立者を理解する一助として花園町修道院の聖堂で祈ったり、マルグリット・ブルジョワ記念室を訪問している。

キリスト教学Ⅰの授業概要は次のとおりである。「キリスト教の成立と発展の源泉は、イエス・キリストの人格と思想である。聖書やDVDなどを使用してイエス・キリストがどのような人物であったのか、どのように生き、どのような教えを伝えたのかを理解する。キリスト教的価値観を学ぶことを通して、自分の価値観に気づき、また、責任ある社会人となるためには、どのように生きたらよいのかを考える。授業始めの立腰やロザリオの祈りなどを通して静かな時を持ち、自分の生き方について振り返る習慣を身につける。」また、目標を5点掲げている。①キリスト教の原点であるイエス・キリストに対する理解を深めることができる。②旧約聖書・新約聖書に対する理解を深めることができる。③キリスト教が生み出してきた芸術、音楽や絵画などの知識を深めることができる。④「建学の精神」を深く理解

し、実践することができる。⑤長い伝統を持つ祈りを学び、内省する習慣を身につけることができる。

キリスト教学Ⅰの授業では「ローモデル（イエス・キリスト）にならった人間の生き方」を骨格にキリスト教の価値観を伝える授業を展開している。学生に「成人」とは「成熟した人間」であり、そのプロセスを次のように説明している。「人は人に倣って人に成っていく。人として成長・成熟していくとき、憧れる人やそうなりたいモデル（型）を持つ人は人生の方向づけを持つことができる。キリスト信者とは、イエス・キリストを救い主と信じて、イエス・キリストに倣って生活していく人たちのことである。」

キリスト教だけでなく、仏教やイスラム教などの世界宗教の共通は「祈り」である。人には本来祈る心が備わっているのだろう。授業では自分を見つめる時間として立腰や振り返り、そしてロザリオの祈りを行っている。自分のため、他者のために祈ることを通して学生は視野を広げ、内的世界に気づいていく。また、人は外的世界を生きるだけでなく、内的世界も豊かに構築していくことができることを伝えている。初回の授業では2013年12月95歳で亡くなられた南アフリカの元大統領「ネルソン・マンデラ」の生き方を取り上げ、彼の生涯を描いた映画「インビクタス」を見せながら授業を行っている。マンデラ氏の「わたしは魂の指揮官」という言葉は彼の内的世界の象徴であり、内的世界を持つことで限界状況をも超えていったマンデラ自身の体験の言葉でもある。

このような導入からはじまるキリスト教学Ⅰの授業内容は①キリスト教学を学ぶ意味：建学の精神②宗教と人間③宗教と芸術④教会について⑤聖書について（旧約聖書）⑥聖書について（新約聖書）⑦イエスの生きた時代⑧クリスマスの意味⑨イエスの誕生⑩イエスの教え（山上の教え）⑪イエスの教え（最も重要な教え）⑫イエスの奇跡物語⑬イエスの受難物語⑭イエスの復活物語⑮まとめ、に構成してある。

長い間読み継がれてきた「聖書」の理解を深める授業では、シャガールのインスピレーションの源泉であった旧約聖書に関する絵画と、岩手県気仙地方の医師山浦玄嗣氏の労作ケセン語訳の聖書を取り上げている。聖書は現在でも人々の精神を鼓舞していることや、「キリストの福音」の土着化を図るために今でも「聖書」の解釈や新たな訳が試みられていることなどを紹介している。山浦氏が聖書を気仙地方の方言に訳すために最初ギリシャ語を学び、それから気仙地方の方言に訳し、聖書を出版したことなども伝えている。

学生たちの聖書の授業に対する感想を幾つか紹介する。「キリスト教が2千年もの間伝えられてきたのは、さまざまな人が命をかけながら周りの人に反対や非難されても守ってきたからである。伝えることに積極的だったからこそ、今私たちが短大の精神の中核ともなっているキリスト教を学ぶことができていると思った。」「昔からキリスト教の人々はキリストを手本として生きようとしていることを知り、私も目標としたい人を見つけることが必要だと

感じた。」「イエス・キリストの誕生を始めは新約聖書で読んでみた。その後にケセン語で同じ箇所を聞いたら、全く何を言っているか意味がわからなかった。ケセン語も東北弁だと考えていたが、日本語のように聞こえなかった。しかし、『子』のことを『わらし』と言ったり、理解まではいかないが福島弁でも聞く言葉があった。祖父母が話す福島弁は理解できても、私たちは使わない。そうしていくことでその地域の言葉がだんだんと消えていってしまうと感じた。伝えていくことは大事だと感じた。」「新約聖書の成り立ちについて学んで、キリスト教の成立や宣教にかかわった人々について知った。何千年前にイエス・キリストが説いた教えなどが今でも私たちに伝えられていることはとてもすごいことだと思う。キリストの弟子たちやパウロの宣教に対する働きかけがあって後世に伝えられているのだと感じた。今までのキリスト教に対するイメージがガラッと変わった。」「紙もペンもなく、書き残すことが不可能だった時代にイエス・キリストのことを後世に残そうと努力した人々のおかげで、人々はキリストの価値観や生き方などを模範として生きていくことができたのだと強く感じた。『人間的成長の源はイエス・キリストにあり』と痛感した。」「誰でも自分が一番良ければという自己中心的に考えて、知らず知らずのうちに他者を傷つけている。それはイエスの弟子たちも同じだったということ。彼らもまた私たちと同じ人間であり、間違いを犯す。それでもイエスは憎しみの心を持たず、深い愛で人間の暗い部分も受け入れていたということ。私も広い心で、他者の間違いを許せるようになりたいと考えた。」聖書が人々の精神を鼓舞したり、聖書の内容を伝えるさまざまな人々の取り組みを知ることで、学生は聖書を身近に感じ、また、キリスト教に対する誤解を取り除くことにも繋がっていることがうかがえる。

「クリスマスの意味」と「イエスの誕生」の授業では映画「マリア」と、新潟教区大瀧浩一師のクリスマスメッセージを使用し、神が人となった出来事、クリスマスの本当の意味を学生に伝えている。「与えられた命を自分のためにばかり使っていると、それはやがて命ではなくなり、誰かに与え、誰か生かそうとすることで命になっていく。命の本当の輝きを持つようになる。そして、本当の輝きをもった命のことを、イエスは『永遠の命』という言葉で表現しようとしているのだらう」³³⁾と大瀧師はクリスマスの出来事に込められた命の秘密について書いている。受講後の学生たちの感想を紹介する。「クリスマスの意味を聞き、聖母が掲げる愛と奉仕の精神を理解できた気がした。与えるということは相手を迎え入れていくこと、自分の中に相手のための場所を作り出していくことということに大変共感した。相手がいなければ自分は成り立たない。私の居場所を作ってくれた周りの人に感謝したい。」「命を与えられた私たちが命の使い方として、愛と奉仕の精神をもとに誰かのために生きることが本当の命の使い方であると学んだ。奉仕する気持ち、感謝する気持ち、思いやりの精神をさらに磨いてイエス・キリストのようなヒトになりたい。」「クリスチャンは生涯にわたって

イエスの生き方を追体験するために教会暦があるということにとっても興味を覚えました。イエスの生き方は今もずっと尊敬されるものなので、私はクリスチャンではありませんが、真似をして見習いたいと思います。」「『命の秘密を伝えるために』の資料を読んだとき、いつも過ごしているクリスマスのイメージが変わりました。プレゼントをもらったり、パーティーをしたりするのが一般的なイメージでした。ところがそこに『命』という言葉が加わると、命とは何なのかを知るのがクリスマスなのだと思います。聖書の言葉『自分の命を愛する』『自分の命を憎む』ことの意味を知り、今日の私の大きな気づきになりました。命の本質を知ることで、自分の人生の背中を押すことができると思いました。」「マリアのDVDは以前見たことのあるものだったので、今日は時代背景も同時に観る余裕を持た。貧しい生活と小さなコミュニティで子を、しかも神の御子を宿したというマリアは、私たちの年代と変わらない。にもかかわらず、神を敬いつづけ、出産までもがいていく姿はとても尊敬する。心が強く、そして良い方であったのだろうと思う。私もマリアの美しい生き方に倣い、共感したことを生活に活かしていきたい。」「『命の秘密を伝えるために』を読み、改めて命の重さとは何か、また、自分の命をどう生かし、人生を歩いていくのかを考える必要があると強く思った。自分を中心として、自分の幸せや利益を得るために生きていくのではなく、支えてくれる家族や友人、知人の幸せのために生きていくことが人間だと思う。私は今、『自分探し』に必死な時である。さまざまな社会活動や人とのかかわりの中で、『自分らしさ』を見つけていく。」学生たちはクリスマスの正しい意味を知り、建学の精神と関連づけて理解していることがわかる。

「イエスの教え」から「イエスの復活物語」までの授業では映画「マタイ福音書」とプリントを使用してイエスの教えと行いについて授業をすすめている。映画「マタイ福音書」は共同訳ではないが、聖書の書かれた順番どおりに物語が展開していくことと、イエスの生きた時代の状況が映像を通して知ることができる。イエスの生まれた時代背景やイエスの教えと行い、そして受難と復活の出来事などを伝えている。人生経験の少ない学生たちにキリストの生き方を伝えていくことは、伝える側にとっていつの時代にもチャレンジが求められていると感じる日々である。

2年次に学ぶキリスト教学Ⅱの授業概要は次のとおりである。「イエス・キリストの弟子たちは現在に至るまで、その信仰に基づいて『教会』と呼ばれる共同体を形作っている。人々の信仰を支えている教会の教え、典礼、祈りなどは教会の歴史とともに発展してきた。2000年に及ぶキリスト教の歴史は『イエス・キリストに出会った人々』の物語といえる。聖パウロやマザー・テレサなどは自分の信仰をどのように表現し、どのように生きてきたのだろうか。イエス・キリストを模範とした人々の生き方を学び、21世紀を生きる人間として福音的価値観をどのように生きたらよいのかを考える。」

目標として①キリスト教教会の発展について学び、どのような意義を持つのかを理解することができる。②さまざまな人々の生き方に影響を与えたイエス・キリストについて理解を深めることができる。③日本の教会の独自の発展について理解を深めることができる。④桜の聖母学院の歴史や創立者について学び、「愛と奉仕の精神」を深く理解すること、を掲げている。

キリスト教学Ⅱの授業は初代教会がどのように発展し、現在の教会にいたったかを理解できるような人物を取り上げている。とくに新約聖書を理解するうえで重要な聖パウロは3回にわたって講義をしている。初回の講義ではコングレガシオン・ド・ノートルダム修道会のシスタージャンヌ・ボッセが96歳のときに著した『しあわせは微笑みが連れてくるの』を取り上げ、祈りについて紹介している。

授業内容は次のとおりである。①祈り②聖パウロ（生涯）③聖パウロ（手紙）④初代教会の成立⑤聖アウグスティヌス⑥教会暦と聖母マリア⑦ヨハネ23世⑧日本の教会の成立⑨聖フランシスコ・ザビエル⑩高山右近⑪ペトロ・カスイ岐部⑫マキシミアノ・マリア・コルベ⑬マザー・テレサ⑭創立者マルグリット・ブルジョワと日本におけるCNDのあゆみ⑮まとめ、に構成してある。

創立者マルグリットの授業を受けた学生たちの感想を幾つか紹介する。「私が今桜の聖母短大で学べているのは、聖マルグリット・ブルジョワや5人のシスターたちのおかげだと改めて実感した。建学の精神である『愛と奉仕の精神』、また、自分を愛するように隣人も愛するというを卒業してからも持ち続けたいと思った。」「今回初めて聖マルグリット・ブルジョワについて学んだ。彼女が20歳の時に全生涯を神に捧げると決意したと聞き、私たちと同じ年頃でそのような決意をするということに驚いたが、とても素晴らしいなと思った。今の自分は、自分の将来や進路しか考えていない小さな存在に思えた。ブルジョワのようにもっと大きな夢や目標を持ちたい。そしてそれに向かって全力で取り組みたい。」「創立者マルグリット・ブルジョワのことをここまで詳細に学んだのは今回が初めてだった。貧しい人、苦しむ人のために誠心誠意を尽くし、生涯を捧げた彼女の思いがこの桜の聖母に生きているような気がした。ここに学ぶ私たちが、その精神のもとにいるということを忘れないようにしたい。20歳のブルジョワのような行動力と、人を想い、大切にしようとする心を私も持ちたい。」「今私たちは当たり前のように桜の聖母短大で教育を受けているが、マルグリットが生きた当時は学校を作ることがとても難しく、様々な苦労があったことがわかった。そのような困難の中で子どもたちに勉強を教えていたことが理解できた。授業ではマルグリットを始め、様々な人が紹介されているが共通しているのは『信念をもって生きた人』だと思った。」「私たちの学校の創立者である聖マルグリット・ブルジョワの話を知り、これからの私の勉強に対する気持ちに変化があった。創立者の思いを知ること学ぶ姿勢も

変わるのだと改めて知った。」「マルグリットの生涯を学び、彼女の教育に対する気持ちの大きさがわかった。確かに聖母で学んでいると、より深い学びが得られていると実感できる。改めて聖母で学ぶ良さを実感できた。オープンキャンパスでもその点を高校生に伝えることができたらよいと思う。」創立者の生き方を知ることを通して、学生たちは自分自身の生き方を振り返っている様子が見える。

本学の創立者マルグリットのことを座学でも知ることができるが、マルグリットが活躍した場所で学生たちに「見て、聞いて、感じてもらうこと」も大切である。そこでH24年度から開講された「国際ボランティア」の海外研修先をコングレガシオン・ド・ノートルダム修道会（CND）の発祥の地であるカナダに移し、姉妹校での語学研修や、創立者の足跡を辿るコースなども加えて内容を充実させた。しかし、H24年度は参加者が少なく実施されなかったが、H25年度は研修参加者が19名集まり、「国際ボランティア」は実施された。

キリスト教学や創立記念日などでも創立者マルグリットについて学生たちは知る機会があったが、マルグリットの活動地に立ってその土地の空気を吸い、創立者の働きに思いを馳せることは学びを深めることにつながる。また、カナダにはCNDに関係した高校や大学もあり、語学研修では姉妹校であるマリアナポリス大学にお世話になった。学校案内や語学の授業では学生たち同士の交流もあり、お互いを知るよい機会となった。

研修旅行に参加した学生の感想文をいくつか紹介する。「マルグリット・ブルジョワの生き方を自分の目で見て学ぶことができた。厳しい時代の背景の中で、女性としての誇りをしっかり持ち、強い信念を持っていたのだと改めて学ぶことができた。マルグリット・ブルジョワの精神がある学校に通えていることに誇りをもちたいと思った。そして、私も誰かの役に立てる人になりたいと強く思った。」「平等社会について考え、人々のために働いていたことを誇りに思った。彼女の教えはカナダはもちろんのこと、桜の聖母短大のように海を越えて今もお受け継がれていることに感動した。」「私は中学・高校と桜の聖母学院で過ごしていたため、以前からマルグリット・ブルジョワの歴史について知っていた。しかし、カナダ研修の前までは『いろいろなことをしていたんだなあ』くらいにしか感じ取っていなかった。実際に彼女が過ごした場所を訪れ、話を聞くと、どんな気持ちでこの地を訪れていたのだろうか、何を想って活動していたのだろうかと考えようになった。マルグリットが眠る教会を訪れたときは、何かこみあげるものを感じた。」「マルグリットの歴史は高校の時も習ったが、実際のカナダでその当時のものを見たり、関連した場所を訪問してマルグリットを身近に感じた。」「マルグリットのルーツを実際に辿ることによって、彼女の偉大さや周りに与えた影響などを深く知ることができた。」「今まで何度もマルグリットのルーツの話を聞いていたが実際にその地を訪れて、私たちの学校の創立者というよりも、女性の教育の先駆者としての認識が強くなった。私も教育者を目指しているので、彼女が思っていた教育

とは何なのか、彼女が残したものは何かを考えながら、私の夢に向かって勉学に励もうと思った。」「たくさん教会を訪れたり、修道院を訪問してシスターたちと交流してその温かさに感動した。また、マルグリットが行ってきた数々の働きを知り、彼女がどれだけ素晴らしい女性であったかを学ぶことができた。キングストンではミサに参加し、本当に良い経験となった。」このように体験学習によってマルグリットについてさらに理解を深めることができた学生たちの言葉は貴重なものを感じられる。

ま と め

若者はいつの時代にもどのように生きるかを模索しながら人生を歩んできた。人は家族、社会、そして教育を通して自分なりの価値観を見出し、人生の荒波に船出していった。そこには人との関わりが良い意味でも、悪い意味でも豊かにあり、数多くの出会いや出来事を通して人間的に成長していくことができた。

現代は今まで以上にソーシャルネットワークの発達により人間関係の輪は広がり、多くの人と出会う機会に恵まれている。しかし、豊かな人間関係を構築できる一方で、人とのコミュニケーションを避けて引きこもる若者や、自分の人生をどのように生きたらよいのか決断できない若者もいる。人間関係が希薄になったと言われて久しい。大人や社会が人間としてのあるべき姿を提示できない混迷な時代だからこそ、今まさに道德教育や生き方の問い直し作業が注目されているのだろう。稲盛氏は次のように指摘している。「私たちはいま、混迷を極め、先行きの見えない『不安の時代』を生きています。豊かなはずなのに心は満たされず、衣食足りているはずなのに礼節に乏しく、自由なはずなのにどこか閉塞感がある。やる気さえあれば、どんなものでも手に入り何でもできるのに、無気力で悲観的になり、なかには犯罪や不祥事に手を染めてしまう人もいます。そのような閉塞的な状況が社会を覆いつくしているのはなぜなのでしょう。それは、多くの人が生きる意味や価値を見いだせず、人生の指針を見失っているからではないのでしょうか。今日の社会の混乱が、そうした人生観の欠如に起因するように思えるのは、私だけではないと思います。」³⁴⁾ 人生の指針を見出しづらい時代だからこそ、ミッションスクールの使命としてキリスト教の源泉であるキリストを伝えていく意義は大きい。

昔も今も変わらないのは、長い伝統を持つキリスト教的価値観を伝えることの難しさである。宗教と聞くと拒否反応を示す人も多いが、宗教の意義を認めている人もいる。森一弘師は「日本社会における人々の宗教に対するニーズは決して衰えて」おらず、「宗教心を求める声は、歯止めのない自由と激しい競争のなかで、人々が自分の欲望の充足と幸せだけを求めて生きるようになって、社会から倫理・道徳がすっかり失せてしまったかのように見える現状を目の当たりにした識者たちの間から上がってきている」³⁵⁾と指摘している。つまり、

識者たちは宗教の世界には倫理・道徳を支える明確な根拠があると認識している。明確な根拠とは、「どのような宗派・教派にもこの世界を超越した存在についての確固とした信念があり、それを人間の生き様を律する究極の根拠としている」³⁶⁾ことである。

現代の人々に「人間の生き様を律する究極の根拠」を提示するために、その内容や方法を再度検討する時期にミッションスクールは来ているのだろう。森師は次のように指摘している。「教義や教会のありようは、2000年の歴史の中で形成され、さまざまに変化して組み立てられてきたものである。その歴史は、キリスト教の豊かさを示すものではあるが、それに基づき、それに縛られるような形でキリスト教を提示することは、日本社会の人々には響かない。日本社会の現実の中に芽生えた、生きた福音を育てるべきである。そのためにはどうしたらよいのか。その答えは、ユダヤ社会に生まれ、人々に福音を語り続けた生きたキリストにある。福音書の中に記されて現れるキリストには、時代や民族の違いを超えて、一人ひとりの人間に向けられた確かなまなざしと人々のもがきや苦しみに対する温かな理解があり、人々の実人生を照らし支える多様で豊かな光を発振している。そこにこそ、キリスト教の源泉がある。日本におけるキリスト教の宗教教育は、教義を創り上げてきた2000年の歴史を突き抜けて、その源泉から再構築していくべき時を迎えている。」³⁷⁾その源泉こそ、前教皇ベネディクト16世が著した『ナザレのイエス』である。イエス・キリストは「完全に人間として生きたのですが、同時に人々に神をもたらししました。彼は『子』として、神と一つであったのです。こうして人間イエスを通して神が現され、あるべき人間の姿が神によって示されたのでした。」私たちは「あるべき人間の姿」を提示するために「イエス・キリストの生き方」「イエス・キリストにならって生きた人々」を伝えていく必要がある。これこそ、ミッションスクールの使命である。

茶道などでよく引用される表現の一つに「守破離」がある。「守破離」とは、マネをして次に自分のオリジナルを混ぜてみて、最後に新しいものをつくっていくことである。「守（ひたすら教えを守り、学ぶ）」は指導者の行動を見習って、指導者の価値観を自分のものにしていく。すべてを習得できたと感じるまでは、指導者の指示のとおり行動を型どおりに行うことである。「破（教えの言葉から抜け出し、真意を会得する）」は指導者の教えを守るだけでなく、破る行為をしてみる。自分独自に工夫して、指導者の話になかった方法を試してみる。つまり、型を破っていくことである。「離（型に一切とらわれず、自在の境地に入ること）」は指導者のもとから離れて、自分自身で学んだ内容をさらに発展させることである。芸道を究めることは、人間の成長プロセスに似通っている。成熟した「成人」になるには、人は人に倣う必要があるのだろう。ミッションスクールにおいて「イエス・キリストにならう生き方」を伝え続けていくことは、昔も今もこれからも、若者の価値観の形成に大きく寄与できるものと確信している。

<参考文献>

- 1) 『朝日新聞』 2014年 1月 1日
- 2) 稲盛和夫『生き方』 サンマーク出版 2004年 196-197頁
- 3) 聖心女子大学キリスト教文化研究所編『宗教なしで教育はできるのか』 棚村恵子「プロ
テスタント系女子教育の理念をめぐって」 春秋社 2013年 159頁
- 4) 聖心女子大学キリスト教文化研究所編『宗教なしで教育はできるのか』 宇野三恵子「カ
トリック学校における宗教教育の意義と今後の課題」 春秋社 2013年 187頁
- 5) 文部科学省ホームページ www.mext.go.jp
- 6) 『朝日新聞』 2013年 9月18日
- 7) 第一回道徳教育推進研究全国大会ホームページ <http://doutoku.jimdo.com>
- 8) 鈴木由美子他「道徳的価値に気づかせるための伝記教材の開発」 広島大学学部・附属学
校共同研究機構研究紀要 2011年 Vol.39 189-194
- 9) 仙台市教育委員会「子どもの読書活動に関するアンケート調査結果」 2003年
www.city.sendai.jp/kyouiku/syougaku/kodomodokusho/keikaku7.pdf
- 10) 仙台市教育委員会『仙台市子ども読書活動推進計画（第二次）』 「親と子の読書活動に関
する調査」 2012年
- 11) 壽川栄太『わが子に読んで聞かせたい偉人伝』 中経出版 2002年
- 12) 渡部昇一『人を動かす力——歴史人物に学ぶリーダーの条件』 PHP 研究所 2011年
- 13) 木原武一『大人のための偉人伝』 新潮選書 1989年 9頁
- 14) 木原武一『続 大人のための偉人伝』 新潮選書 1991年
- 15) 鎌田浩毅『知的生産な生き方 ローモデルを求めて』 東洋経済新報社 2009年 2-3頁
- 16) 居神浩「マージナル大学における教学改革の可能性」 『大衆化する大学 シリーズ大学』
岩波書店 2013年 76頁
- 17) 前掲「マージナル大学における教学改革の可能性」 92頁
- 18) 稲盛和夫『生き方』 サンマーク出版 2004年 198-199頁
- 19) 友野伸一郎『対決！大学の教育力』 朝日新書 2010年 5頁
- 20) 前掲『対決！大学の教育力』 63-64頁
- 21) 阿部謹也『学問と「世間」』 岩波新書 2001年 124頁
- 22) 前掲『学問と「世間」』 135-136頁
- 23) 前掲『学問と「世間」』 53頁
- 24) 前教皇ベネディクト16世ヨゼフ・ラツィンガー 里野泰昭訳『ナザレのイエス』 春秋社
2008年 1頁
- 25) 前掲『ナザレのイエス』 13頁

- 26) 和田幹男『聖パウロ その心の遍歴』女子パウロ会 1996年 8頁
- 27) 前掲『聖パウロ その心の遍歴』339頁
- 28) バルバロ訳『キリストにならう』ドン・ボスコ社 2009年 21頁
- 29) 前掲『キリストにならう』31頁
- 30) 菊地多嘉子訳『メール・ブールジョワの手記』コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会 147頁
- 31) カトリック聖人伝 http://pius.xii.jp/catholic_saint.htm
- 32) カトリック長崎大司教区「共に歩む旅 小共同体と共に歩む求道者の教理書」2008年 3頁
- 33) 大瀧浩一「クリスマス 本当のはなし」ドン・ボスコ社 2008年 4-9頁
- 34) 稲盛和夫『生き方』サンマーク出版 2004年 13頁
- 35) 森一弘・田端邦治・M・マタタ編『教会と学校での宗教教育再考』森一弘「生きる力を伝える教育——人に響く宗教教育を求めて——」オリエンズ宗教研究所 2009年 24-25頁
- 36) 前掲『教会と学校での宗教教育再考』森一弘「生きる力を伝える教育——人に響く宗教教育を求めて——」25頁
- 37) 前掲『教会と学校での宗教教育再考』森一弘「生きる力を伝える教育——人に響く宗教教育を求めて——」34-35頁